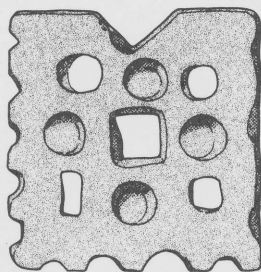


# 西宮市立郷土資料館ニュース



1991. 7. 1

資料館ノート

## 第6回特別展「西宮の職人たち」

(平成3年8月1日→8月31日)

西川卓志

本館は、職人の方がたが愛用された諸道具を、数多く保管している。これらの道具は、それぞれの仕事に適した形に作られ、またその形は職人たちの仕事の特徴をよく表している。

西宮の町場における職人たちの記録は、近世初頭にまで遡る。現在「如意寺」に残る過去帳には、すでに永正年間（1504～1521）に「番匠彦四郎」という大工の名前がみえる。江戸時代に下ると、いっそうその種類は増し、畳屋・桶屋・鍛冶屋などその仕事の内容を屋号として冠したものが増加する。その後、名塩紙すき職人たちや酒造業にみられるように組織化がすすみ、それらのうち多くの技術は現在も継承されている。また、明治時代になって生産量が増加する「竹籠造り」、あらたに導入された「寒天造り」などの諸道具には、与えられた自然環境のもとで創意工夫する人びとの努力の形をみることができる。

このような西宮における「諸職」の生い立ちを考慮し、本館収蔵資料を中心に以下の各仕事の内容とその道具を展示する計画である。

### 1, 灘酒造り用桶および樽造り道具一式

酒造りには必要不可欠な桶および樽を製作する特徴的な道具を白鹿記念酒造博物館のご協力で展示する。

### 2, 「かじ為」の鍛冶道具

町場で農具などを製造していた鍛冶屋の鍛冶道具（塚本文子氏寄贈）を展示する。

### 3, 大工道具

木造の町屋を造る大工2軒から寄贈されたの諸道具を紹介する。

### 4, 山口町の竹籠造り

地元の協力をいただいて、伝統ある竹細工の諸道具とその製品を展示する。

### 5, 船坂の寒天造り

明治になって導入された寒天造りを紹介し、その特徴的な道具について解説する。

### 6, 名塩の紙すき道具

江戸時代のはじめから連続と続けられている名塩の紙すきは、その独自の技法と独得の製品を伝えている。これらをその道具類とともに紹介する。

### 7, 船坂の山仕事

かつて西宮の山間部で活況をていした林業の道具を展示する。

展示を予定している資料は、かつて活躍された職人の方がたからのご寄贈品や、現在使用中または大切に保管されているものである。貸出を快諾いただいたことに末筆ながら感謝し、今後のご指導をお願いするものである。  
(にしかわたくし 当館学芸員)

## 西宮市塩瀬町名塩の年中行事抄

井 阪 康 二

### 1 はじめに

今年の特別展は「西宮の職人たち」ということで、紙すき道具、竹細工道具などを展示します。それで、ここでは以前に名塩にあります紙屋の年中行事を教えて頂いたことがあるので紹介します。

名塩とは

名塩は西宮市北部の山の中にあります。ここは田の面積が少なく、水の温度も低いので、米がつくりにくい所で、農業だけでは生活できません。そのために紙の原料となる雁皮が山にはえているのを利用して、紙すきを仕事とするようになりました。名塩の紙すきは江戸時代にさかんとなり、名塩の紙は大変有名になりました。そして、名塩は紙すきにかかわる仕事をする人達、農業をする人達、その両方をする人達、商売をする人達の住む所となりました。

### 2 紙屋の年中行事

年中行事は、米つくりの農作業のかわり目に、米の豊作を願ったり、米が取れたことを祝って行なわれる、正月・小正月・節分・山ゆき・お盆など、毎年くりかえし行なわれる行事のことをいいます。

紙屋の年中行事は、農家の年中行事とくらべて、特別にかわっているわけではありません。正月元旦に紙屋は若水をくんで雑煮を炊いて食べます。小正月の15日の行事も行なわれます。名塩はこの日大きなトンドの行事があり、紙屋は仕事を休みます。4月のはじめ、農家はこれから農作業がいそがしくなりますので、1日仕事を休み家中でご馳走を持って、近くの山や川原へ出かけます。この頃、紙屋も1日仕事を休み、ご馳走を持って花見に行きます。農家は田植が終わった後、7月2、3日頃にハンゲショウ（半夏生なつむぎ）といって仕事を休みます。これにならって紙屋もこの日は仕事を休みます。などなどでありま

す。

ただ、紙屋だから行なわれている行事もありますので、そのことを中心にお話しします。

### 3 正月の準備

モチツキは12月25日、26日頃で、紙屋は正月用の餅を1石程つきます。オカザリ（鏡餅のことでオカサネともいう）は仏壇、神棚、床の間、紙すきのふね、紙すき場、紙はき場にかざります。紙すき場などへは、大きな盆にうらじろを敷き、餅2コのオカサネのをせ、上に葉つきみかんを置いてかざります。

職人へのこころづけとして、紙屋の主人はオカサネと冬の肌着をおくりました。

スキジマイは26日、27日頃に紙のすきおさめをします。この日は仕事が終わるとお正月がくるようにと、紙すきの道具をきれいに洗います。そして、晩に職人へ紙屋はご馳走を出しました。このご馳走には必ずトロロ汁を出しました。

紙屋はこの日以後、正月がすむまで仕事を休みました。そして、ススハライ、正月のかざりつけなど、正月の準備にかかります。

### 4 正月

正月元旦は雑煮を祝います。

2日は職人が紙屋へ新年のあいさつにきます。あいさつに来た人が大勢あつまると、ニワトリをつぶして、すき焼きをしました。

シゴトハジメは1月4日で、紙屋はこの日までは家事以外の仕事はしません。この日は5日からの仕事のために、紙すきの準備をします。紙すき場のオカザリは5日からの仕事の邪魔になるので、4日にさげます。

ナナクサガユは7日です。

トンドタテといって14日の朝より1日がかかりでトンドの用意をします。トンドは竹でつくり、下の直径が6メートル、高さ15メートルの円錐形をしたものであります。これを八

幡神社の境内につくります。トンドは老人会が各シマ（シマは名塩を地区ごとにわけた町内会のようなものをいいます）の老人会単位の順番でつくります。トンドは前年の10月より竹を切り、用意をします。トンドの費用は自治会が出しています。

昔は宮守（八幡神社の世話をする1年交替の神主であります。）が親せきに手伝ってもらい、トンドの用意をしました。トンドの材料、手伝いの人の昼食や慰労会などの費用は、宮守が全部負担しました。そのため、宮守の負担が大きいため、自治会が費用を持つことになり、15年程前から老人会がトンドを用意することになりました。

15日はトンドであります。トンドは名塩全体の行事として、八幡神社の境内で行なわれます。早朝3時半に教行寺の太鼓楼よりコンコト（まな板のような板を太鼓のバチでた

たく）の合図がなると、ヨウネン講といって14日の夜より徹夜でおきていた人達がトンドの所へ集まってきます。午前4時に袴姿の宮守達によってトンドに火がつけられます。このトンドはある程度もえますと、恵方にたおれるようになっていきます。また、トンドのはじける竹の音が大きい程、その年は商売繁盛などといわれます。トンドはもえつきますと、子供達が残り火で餅を焼いてもちかえり、小豆粥に入れて食べます。紙屋はこの日仕事を休みます。

ヤブイリは16日で、職人や女衆は里の居心地がよいので、休みを長引かせる理由に腹痛を使いました。そのために「ヤブイリ三日、腹痛三日」という言葉が残っています。

#### 5 春にかけての行事

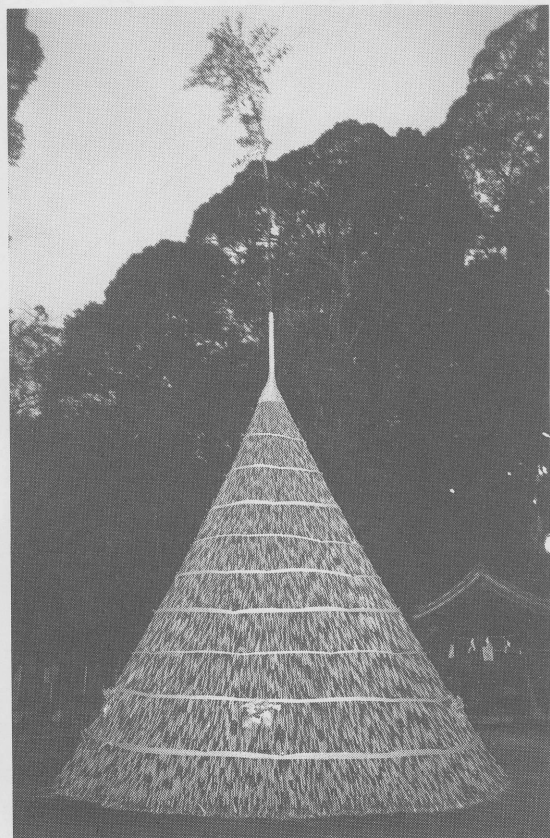
旧正月は1月16日より立春までの間にあります。旧正月は新正月程行事はありません



トンドタテ



もえるトンド



完成したトンド

が、紙屋は仕事を3日間休んだようであり  
ます。

2日は節分、立春、神さん正月の行事が  
あり、神さん正月には味噌じたての雑煮を食  
べ、紙屋は仕事を休みました。

3月18日は東山弥右衛門の墓で弥右衛門  
の慰霊祭がありました。東山弥右衛門は越前  
より紙すきの技術を名塩に伝えたというこ  
とで、紙屋はその徳をたたえて、安政2年  
(1855)に彼の墓をたてました。

江戸時代末に紙屋は不況になりました。く  
わえて尼崎藩が名塩紙を専売制にしようと  
していましたので、紙屋はこれに反対しまし  
た。このような状況に紙屋は不安をかんじ、  
名塩紙の名を世間に知らせること、紙の景  
気をたてなおし、紙屋仲間の団結をはか  
るために、この墓がたてられました。

この日紙屋は仕事を休み、弥右衛門の墓  
にお詣りしました。午前10時より昼まで、  
3カ寺のお坊さんが来て墓前でお経をあ  
げます。昔はこの日に餅まきがあり、子  
供が行きますといわおこしのお菓子  
がもらえました。

4月3日のひな節供には、紙屋は仕事を  
休みました。4月の初旬にはハナミを  
しました。

### 6 夏にかけての行事

オズキヨウカは5月8日でお釈迦さん  
の誕生日です。紙屋はこの日仕事を休  
みました。そしてこの日より8月のお  
盆まで、職人は昼休みに2時頃まで  
昼寝が許され、3時にコビルとい  
って、おにぎり、のり巻が職人に  
出されました。

ウオジマといって、5月のかかりに  
鯛ばかりの料理をつくり、紙屋は職  
人や親せきをよんでご馳走しまし  
た。この時期、鯛の味噌汁あ  
らだき、タイメンなどの料理を作  
りました。

タンゴの節供は6月5日であり  
ます。

ハンゲショウは7月2日、3日頃  
で、紙屋は仕事を休みました。土  
用は7月18日頃であります。

### 7 秋にかけての行事

ナヌカボン(紙屋)は8月7日  
で、紙屋は仕事を休

みました。

8月13日は紙屋はスキジマイに  
しました。職人の給料は盆と年末に  
支払いがされる節季払いで、この  
日が盆の分の支払日であります。  
スキジマイをした後、給料をもら  
います。また、紙屋の主人より職  
人へ肌着や浴衣、ソウメンなど  
がおくれます。このおくり物がな  
いと紙屋をやめさせられたと勤  
ちがいして、他の紙屋へかわる  
職人がいました。

この日からお盆休みとなり、8月  
いっぱい休みます。この間に紙  
屋はカミイタアライ、イケガエ、  
イドガエをします。8月の間は  
紙をすきにくいので、紙すき道  
具の1年間のよごれをため池で  
洗います。この後、ため池をさ  
らえイケガエをします。紙す  
きの水はため池の水を使いま  
す。ため池はかなり深いので、  
男の人が大勢で水をかき出  
します。

14日、15日、16日が  
お盆であります。16日、24日、  
9月1日と盆踊りがありました。

9月1日はハッサクで、「これ  
でお盆はしまいや」とい  
います。行事は特別にありませ  
んが、この日、紙屋は仕事を  
休みます。

秋の彼岸に、現在は東山弥右衛門  
の慰霊祭が行なわれています。  
10月19日の秋祭の前、14日  
にオサカナイチがありました。  
西宮の浜の方より魚を売りに  
きました。市がたつと夕  
方から木元の人達もメカゴ  
を持って、祭用の魚を  
買いにきました。この市は  
昭和14、5年頃まであり  
ました。

11月にイノコがあり、そ  
して、お寺や各家では報  
恩講が行なわれました。

そして、正月の準備  
となります。

これらの行事は、お  
おむね戦前まで行な  
われていました。

ここに紹介しましたこ  
とは、宮脇さださん(大正6  
年生)に教えていただいた  
ことに、『なじおの年中  
行事』(名塩探史会 昭和  
57年4月刊)と丸谷しのぶ  
さんの「名塩の年中行事」  
(「御影史学論集」第7号  
昭和57年9月刊)を参考  
にまとめました。

(いさか やすじ 当館館長)



## 小学生と「木製石庖丁」

合田 茂伸

### 1、土曜てんじ室

当館では、1990年度から新しく、「土曜てんじ（展示）室」という一種の体験学習プログラムを設けた。市内の小学生を仮想対象として、おおむね2か月に一度、第3土曜日の午後2時30分から4時まで開設している。土曜てんじ室の開設主旨や全体の概要は、本誌第8号掲載の「土曜てんじ室について」にくわしい<sup>(1)</sup>。1991年5月18日には、土曜てんじ室「むかしの人たちの道具をつかってみよう」シリーズのひとつとして、石庖丁をとりあげた。実物の石庖丁は、資料保存上の理由から使用せず、木材で形作った、真正「石庖丁形木製品」を用いることにした。ただし、出土遺物としてのいわゆる石庖丁形木製品=木製穂摘具とはその形状が異なるので、ここでは、「木製石庖丁」としておく。以下に、参加した多数の小学生、中学生、および筆者らの木製石庖丁使用感を記す。

### 2、「木製石庖丁」の製作

木製石庖丁は全部で7枚作ることにした。それぞれ異なる型式とし、外灣刃半月形、直線刃半月形、杏仁形、長方形を写した。サイズは多数の来場が予想される小学生の手に合うよう、やや小さく設定した。材料は厚さ9mmの杉の柾目板である。加工には電動工具を用いた。製作手順は、石庖丁とは少し異なる。遺跡出土の木製穂摘具にならって、木目が刃にたいして直交するように木取りをして、電動鋸で粗く外形を切り抜いたのち、グラインダーによって整形し、刃を作りだした。刃はすべて石庖丁の主流である片刃とした。刃の整形が終了したものを、電動ドリルで穿孔し双孔を設けた。穿孔途中に、2枚が孔の部分で木目にそって折れてしまった。出土木製穂摘具に多い、コナラのような硬くて重い広葉樹では、破損しにくいであろうか。穿孔時に敲打を伴う石庖丁ほどでないかもしれない

が、木製品のばあいも、穿孔時に破損することがあったであろう。本体を仕上げ、双孔に麻紐を通して環状に結び、指掛けとした。こうして木製石庖丁は完成した。摘み取る穂は、前年収穫されたものである。完成した木製石庖丁を、石庖丁の通常の使用法とされる方法で試用すると、容易に穂穂を摘み取ることができた。よく乾燥した穂ゆえかと考え、屋外にイネ科(?)植物を求め、これを試してみたが、同様の結果を得たので、土曜てんじ室で用いることにした。

### 3、「木製石庖丁」の使用

最初、石庖丁の双孔に紐を通していないものを参加者に見せ、その利用法を考えてもらったが、指掛けのための紐孔であると答える参加者が多かった。社会科教科書の影響か。指掛け紐の効用についての意見をきくと、「作業時に力がうまく作用するためのもの」、「作業中の落下防止のためのもの」というふたつの意見が半ばした。紐を掛ける指はどれかをたずねると、小指をのぞくすべての指に意見が分かれた。

参加者には(木製)石庖丁の使用法はまったく知らせず、各人が自由な形式の木製石庖丁を選択し、それぞれの使用方法で、穂穂を摘み取った。摘み取り方には、いくつかの方法が現れたが、大きく3つの方法にわけることができる。第1は、左手で穂穂のすぐ下をつかみ右手の木製石庖丁で挽き切る。第2は、左手で穂穂のすぐ下をつかみ右手の木製石庖丁で押し切る。第3は、一般に石庖丁の使用法とされる方法で、木製石庖丁をもつ右手だけで折り取る。第1の方法では穂穂を切り取るというより、ちぎり取るといった状況で、道具を使う効用はあまりない。第2の方法では刃部整形面にある傾斜面を下面として使用すると、押し切ることができる。第1、第2の方法は、鎌による刈り取りをイメージしてい

るようであった。第3の方法は、学校教科書で知ったという参加者がいた。体験後、使用方法ごとにその効果の程度をたずねると、圧倒的に第3の方法が支持された。3通りの方法のほか、庖丁のように台にのせた稲穂を切る方法、親指と木製石庖丁の刃との間に稲穂を挟んで靱をしごき取る方法などの意見があった。後者の方法を何人かが試したが、掌が痛くなるため、あまり支持されなかった。紐に指を掛けることなく稲穂を折り取っても、動作に変わらない。紐は脱落防止に効果があるようである。木製石庖丁の型式による作業能力の差は認められなかった。数回摘み取ると刃先は丸く摩滅し、摘み取りにくくなる。連続使用には、ナイフでの刃の研ぎ直しが必要である。

#### 4、「木製石庖丁」の使用痕

木製石庖丁は土曜てんじ室開催中随時、あるいは終了ののち観察した。木製石庖丁で数回稲穂を摘み取ると、背部、紐孔の縁に「テカリ」を生じるようになり、刃先は年輪にしたがって凹凸が生じ、鋸刃状を呈する。このため、摘み取りが効果的に行えなくなる。稲穂を折り取るかわりに、この鋸刃を利用して、挽き切ろうとしたが、茎が刃に引っかかりうまく切りとることはできなかった。刃先の摩滅は、広葉樹材製の木製穂摘具では、この木製石庖丁ほどではないであろうが、作業途中の研ぎ直しは必要であったろう。ただし、今回の木製石庖丁の刃の角度は約45度で、出土

木製穂摘具に較べて角度が大きく、刃がやや厚い。

#### 5、木製穂摘具について

木製穂摘具は現状では、第3様式期に近畿地方を中心とした地域に出現することがわかっている<sup>(2)</sup>。鳥取県目久美遺跡例<sup>(3)</sup>などを除いて、多くは直線刃ないし内湾刃型式である。この型式は、双孔石庖丁においても弥生時代中期の近畿地方ではもっとも多い型式である。土曜てんじ室で得られた木製石庖丁の使用感からは刃の湾曲は摘み取り動作にはあまり影響を与えないことがわかった。双孔石庖丁においても、刃の湾曲が摘み取り動作に影響を与えないとすると、石庖丁の型式は使用法の違いに起因する型式差ではなく、石庖丁の形状の違いを表しているいわば石庖丁の形のアイディアに起因する型式差であると考えることができる。木製穂摘具においてもまた、同様であろう。木製穂摘具の型式と分布は、木製穂摘具が、直線刃・内湾刃型式の双孔石庖丁の卓越する弥生時代中期の近畿地方において、双孔石庖丁の形を写して出現することを表しているであろう。

#### 註

- (1) 西川卓志「土曜てんじ室」について』『西宮市立郷土資料館ニュース』第8号 1991年
- (2) 工業普通「木製穂摘具」『弥生文化の研究』5 (道具と技術I) 雄山閣出版 1988年
- (3) 米子市教育委員会『目久美遺跡』1986年  
(ごうだ しげのぶ 当館学芸員)

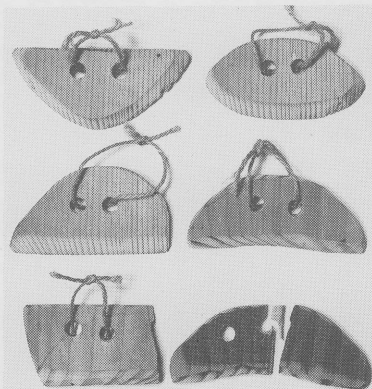


写真1 「木製石庖丁」

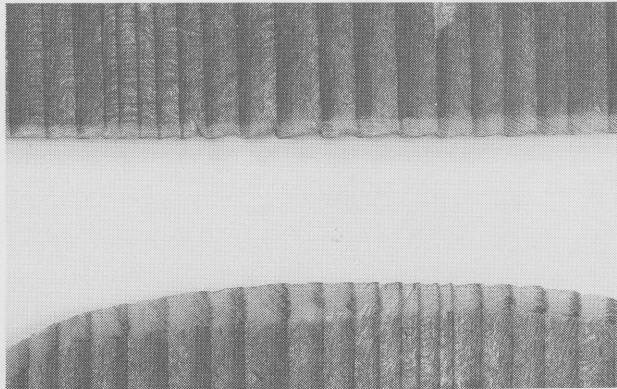


写真2 刃先の磨滅状況（約1.4倍）

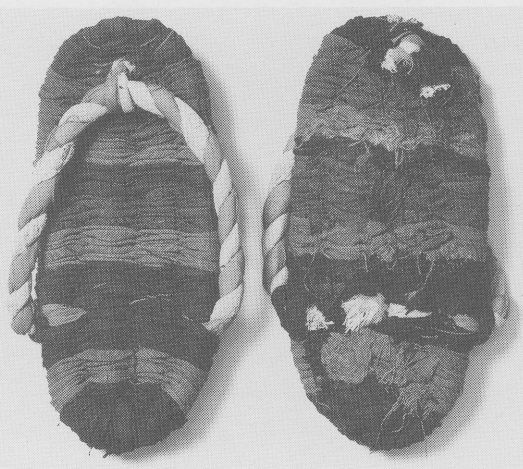
## 初誕生の時のゾウリ

土 居 佳 代

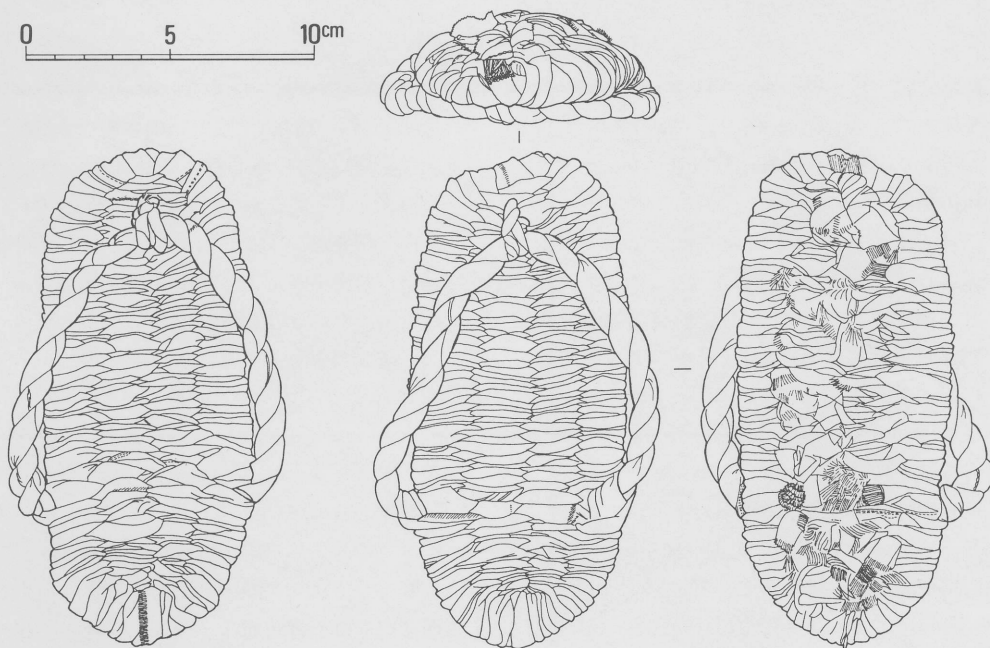
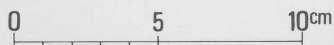
平成元年四月十九日、神戸市兵庫区の木村昌弘氏（昭和九年生まれ）より、初誕生の時に使うゾウリが寄贈された。長さ一七、〇センチメートル、横幅九、六センチメートル、高さ四、一センチメートルの藁草履である。藁は丁寧に木綿の色布で巻かれて編まれ、鼻緒の部分には赤と黄の色布が交互に使われている。木村氏のお母様は西宮で商売をされており、木村氏を宿していた頃、西宮在住の方から「祝いに初誕生にはかすゾウリをもってきてやろう」と頂いたそうである。実際には使用せず現在に至る。

先日、本稿を書くにあたり財団法人日本はきもの博物館の主任学芸員をされている潮田鉄雄氏にお会いした。先方で初誕生儀礼に使う履き物は重要有形民俗文化財に指定され、合計十二点、形式はワラジ・ゴンゾウワラジ・ゾウリワラジ・ゾウリ等にわけられ、大きさは二四、七センチメートルのものから一

〇、三センチメートルのものまで、多種にわたる。しかし、当館の台座部分にまで色布をもちいているものは見当たらなかった。初誕生の儀礼は各地で行われ、祝い方も種々雑多であるが、その中でも履き物を使用する内の



初誕生の時のゾウリ写真



初誕生の時のゾウリ実測図

数例を、財団法人日本はきもの博物館所蔵の資料と共に紹介しよう。

栃木県河内郡豊郷村では、「一年目に餅をつき、丸くまるめて、普通二個くらいを重箱に入れて赤子に負わせる。その餅十五個くらいを重箱に入れて里へ贈る。里から返礼として重箱の中へ赤子の足につけるようなもの、靴とか下駄を入れて返す。」<sup>(1)</sup>

石川県能美郡新丸村では、「(1)白山のボッカ(歩荷、荷運び人)が山の急斜面の道ではいた。ふつうの草履に比べ、足指が出ずにケガをせず、乳がないので緒がきれなくてよかった。昭和10年ごろに歩荷も高令者となりすたった。また(2)満一才の初誕生祝いの男の子に担がせて、歩荷のように足が達者になるようにと用いた。」<sup>(2)</sup>

熊本県人吉市大野町では、一年以内に歩きだすと、初誕生日にわらじをつくり、鏡餅より大きめの餅に米をからわせ、その上を歩かせる。この時には、両家の祖父母や近所のひともよんで祝う。一年以内に歩かなければしない。

また宮崎県西臼杵郡では、「一年目の誕生日に歩く子供は、餅踏みといって紅白の餅を

ついて箕の中に入れ、わら草履をはかせて歩かせる。その餅を近親者に贈って祝う。当日親族・知己が集まって幼児の将来を祝福する。」<sup>(3)</sup>

初誕生は、栃木県河内郡豊郷村、石川県能美郡新丸村においては、生後一年目を意味し、熊本県人吉市大野町・宮崎県西臼杵郡では、一年以内に歩きだす子をその対象とする。このように、初誕生を祝う対象は微妙に違っている。

初誕生を迎える子が歩き始めるか否かは大きな変化であった。成長の早遅や相違は強い関心をひくものであり、節目になっていたように思われる。

本稿を書くにあたり、潮田鉄雄氏、田中久夫先生、井阪康二館長よりご教示を賜り、ここに深く感謝申し上げます。

#### 参考文献

- (1) 恩賜財団母子愛育会「初誕生」『日本産育習俗集成』 第一法規出版株式会社1975年
- (2) 財団法人日本はきもの博物館「資料記録表」
- (3) 前掲(1)と同じ

(とい かよ 当館嘱託)

#### 寄贈資料一覧

平成3年：看板・かなとこ・ドリル・ならし・かなきり・片つるはしの先・やっこ＝鍛冶道具(塚本文子)、やぐらこたつ・たばこぼん2点・ふご・おひつ・こたつ(平木潔)、ヤナギゴオリ(井上 香)、扇風機・蠅取り器・火鉢(上田千代)、船員用物資配給記録表(福山保則)、出征勇士への新年の挨拶

摺状・『追悼録』・写真(田口梅子)、ミシン(松浦 忠)、さし網・いけす・いわし洗い桶・もんどり2点・カーバイトランプ・一升榼・網3点・うたせ網の沈子・石臼(鹿塩健一)、西宮本長寿講道具1式16点(松浦武恒) 寄贈ありがとうございました。

(平成3年1月～6月、敬称略)

#### 目次

##### 資料館ノート

- 第6回特別展「西宮の職人たち」  
(西川卓志) …………… 1
- 西宮市塩瀬町名塩の年中行事抄  
(井阪康二) …………… 2
- 小学生と「木製石庖丁」  
(合田茂伸) …………… 5

##### 収蔵庫ノート

- 初誕生の時のゾウリ  
(土居佳代) …………… 7
- 表紙：ハチノス(鍛冶為旧蔵)
- 西宮市立郷土資料館ニュース第9号
- 発行 1991年7月1日 西宮市立郷土資料館  
〒662 西宮市川添町15番26号 0798-33-1298